

特集◎今、何が問題か

「太平洋の世紀」に

細谷雄一

(慶應義塾大学法学部教授)

Yuichi Hosoya

1971年生まれ。慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程修了。博士(法学)。専門は国際政治学・外交史。北海道大学法学部専任講師、敬愛大学国際学部専任講師を経て現職。著書に『戦後国際秩序とイギリス外交』(創文社、サントリー学芸賞)など。

「大西洋の世紀」から「太平洋の世紀」へ

今、世界秩序において巨大な地殻変動が起こりつつある。国際政治の中心が、大西洋から太平洋へと移りつつあるのだ。新たな国際環境が生まれつつあるなかで、世界をどのように見るのかという認識枠組みを、われわれは大きく修正しなければならない。そうでなければ、今

後の国際政治の趨勢を見誤ることになるであろう。

大航海時代が始まるまで国際政治は地中海がその中心であった。新大陸が発見されると徐々にヨーロッパの君主たちの関心が大西洋の向こう側に向かい、同時に彼らは東地中海を支配していたオスマン帝国の脅威に怯えていた。一八世紀末には、北米とフランスという大西洋の両側において、「環大西洋革命」としての政治変動が起こった。フランス革命とアメリカ独立戦争である。これに

よりリベラリズムやデモクラシーといった政治理念が環大西洋地域で発展する。また産業革命と定期航路の就航が、この地域の市場としての一体化を促進する。

政治の近代化と経済の工業化が進展するなかで、圧倒的な経済力と軍事力を武器として、欧米諸国が植民地化によって世界全体へとその影響力を拡大していった。他方で、一九世紀半ばのクリミア戦争以後、急速にイースラム帝国としてのオスマン朝の力が弱まっていくと、ヨーロッパの大国が次第に東方へと関心を広げていき、その先にある極東の清帝国や日本の重要性が高まっていった。この頃に、太平洋は世界の中心の遠く彼方にあり、それは大西洋を中心とした国際政治の世界では周辺に過ぎなかった。しかしながら、蒸気船や鉄道そして電信などの発明と普及によって、徐々に太平洋世界が国際システムのなかへと組み込まれていく。

二〇世紀は「アメリカの世紀」（ヘンリー・ルース）となり、よりいっそう大西洋の重要性が高まった。第一次世界大戦後のパリ講和会議のためにアメリカのウッドロウ・ウィルソン大統領が、アメリカ大統領としてはじめて大西洋を横切つて旧大陸に降り立った。第二次世界大

戦においてアメリカは、ヨーロッパ大陸へ巨大な兵力を派兵した。一九四一年八月に、アメリカのフランクリン・ローズヴェルト大統領とイギリスのウィンストン・チャーチル首相との間で、戦後構想の中核となる理念を宣言した。大西洋憲章である。

冷戦の時代は大西洋を挟んで、アメリカとソ連という二つの超大国が対峙する構図となった。一九四九年四月には大西洋同盟が成立した。二〇世紀はいわば、アメリカとヨーロッパという環大西洋世界を中心とした、大西洋の世紀であった。東アジアは、大西洋から見れば「極東」^{フレイム}でしかなく、そこで展開した朝鮮戦争やベトナム戦争では共産主義勢力とアメリカが凄惨な戦闘を経験した。「太平洋」^{パシフィック}は、二〇世紀においては「平和の海」^{パシフィック}とはならなかったのだ。戦争と革命により、二〇世紀後半のアジアは大きな混乱と停滞に見舞われた。

確かに、二〇世紀の幕開けと同時に、アメリカ政府は徐々に太平洋の重要性を認識するようになっていった。セオドア・ローズヴェルト大統領はすでに、一九〇三年に次のように述べている。「大西洋の時代は今その発展の絶頂の時にあるが、間もなく自ら手がすることの出